

松山市文化財調査報告書Ⅲ

長隆寺跡調査報告書

1974

松山市教育委員会

序 文

日本列島を改造する急激な巨溝の土木工事が行なわれ、それに併って永く地中に残っていた埋蔵文化財の発掘調査の件数も増加しております。狭い日本には古代からいたる所に人が住んでいたので、すべての遺跡を保存することはできない現状にあり、保存と開発の調和が要望されます。

しかしながら埋蔵文化財は特に、ひとたび調査もせずに破壊すれば永久に闇から闇に葬られてしまうことになるので、その調査は慎重に行なわなければならないものと思います。

久米地区には山田池縄文遺跡、芝ヶ崎古墳群、波賀部前方後円墳跡や住居跡群が無数に存在しております。また来目部小幡が居住し、久米氏の根拠地とも考えられ、正倉院文書にも久米直熊鷹が居住したことが記載されております。同地は古代文化発祥の一端を占めていたといえましょう。永く純農村であったこの地区も急速に住宅地に変ぼうしております。大山正風氏が調査された頃は、まだ古いたたずまいが残っておりましたので十分な調査が行なわれたことは古代寺院跡の研究には貴重なものであります。

ここに、その成果を松山市文化財報告書として刊行し、後世の研究の資料とすることにしました。本書が広く利用されることを望んでおります。

本調査にあたられた大山正風氏をはじめ、協力された方がたには厚くお礼申しあげます。

昭和49年3月

松山市教育長 関 谷 勝 良

目 次

序 文	
I 調査の経過	1
II 遺跡の位置と環境	1
1 遺跡の位置	1
2 自然的環境	1
3 歴史的環境	2
III 遺 構	3
1 塔 跡	3
(1) 遺構の状況	3
(2) 遺構の考察	5
2 講堂跡（推定）	6
3 伽藍考察	7
IV 出土遺物	8
1 瓦	8
2 出土瓦の考察	9
(1) 斬丸瓦	9
(2) 斬平瓦	9
(3) 丸 瓦	10
(4) 平 瓦	10
V 総 括	10
1 出上瓦の分布と伝播	10
2 長隆寺建立の時代背景	12
文 献	13
参 考 文 献	14
おわりに	15
 Fig 7 塔、講堂跡礎石実測図	16
Fig 8 境内礎石実測図	17
Fig 9 ~22 出土瓦実測図	17
P L 1 ~28	22
Fig 1 長隆寺跡付近測量図	31
Fig 6 伽藍想定図	32
Fig 3 塔跡実測図	33
Fig 4 基壇東部トレンチ断面図	34
Fig 5 塔、講堂跡測量図	35

Map1 長隆寺跡周辺の地形図



I 調査の経過

愛媛県下の古代寺院跡を数えるならば、その数、40余を挙げることができるが、その大半は寺に伝わる縁起によるものが多く、出土する古瓦などの考古学的資料による寺院跡となると数少なく、さらに考古学的伽藍考察に基づく寺院跡となると僅か1か所にすぎず、かつ発掘調査による寺院跡は皆無であり、国指定史跡「法安寺跡」もその域を出るものではない。

(注1)

これらの状況から、発掘調査による伽藍考察のできるうる寺院跡をと、県下各寺院跡を調査した結果、最もその可能性を残しているのが長隆寺である。長隆寺においては一部、古瓦集取家の乱掘にあってはいるが、十分発掘のペースを残している。

古代寺院解明の意図に、長隆寺住職、関亨道氏のあたたかい賛同を頂き、松山市教育委員会、愛媛県教育委員会の協力指示を得て本調査が実施された。なお本調査の諸経費は全て私費負担である。

発掘調査に先立ち、昭和40～41年にボーリング予備調査、および付近の測量を実施、発掘調査は昭和42年7月25日～8月20日まで行った。調査には下記の諸氏の協力を得た。

宮 本 佳典	大谷大学文学部3回生	武 内 範男	大谷大学文学部2回生
河 野 豊	大谷大学文学部2回生	永 井 豊	大谷大学文学部2回生
波多野 保俊	大谷大学文学部2回生	門 田 智	松山南高校3年生
大 山 正風	大谷大学文学部4回生		

なお、発掘調査の実施にあたっては、愛媛県文化財専門員、愛媛大学助教授(当時)西田栄氏の指導、及び助言を頂いた。

本報告書は、大山の卒業論文「伊予長隆寺跡の研究」と同副論文「松山地方に於ける寺院跡」の骨子に基づき作成した。したがって本文、実測図、拓影等の文責は全て大山が負うものである。

注1. 伊予の法安寺について…鶴久森延峯(考古学論叢、第6輯) S. 12

II 遺跡の位置と環境

(1) 遺跡の位置

長隆寺の絶対位置は、東経 $132^{\circ}48'40''$ 、北緯 $33^{\circ}48'20''$ の交差する地域で、行政的位置は、愛媛県松山市来往 849～851番地内に所在する。(Map 1)

(2) 自然的環境

松山(道後)平野の発生は、温泉郡川内町より生じ、高龜山系、石鎚山系からの砂礫の流出によって、山麓のいたるところに洪積台地、同台地性微高地、微層状地を形成しつつ沖積平野となり、瀬戸内海に達する。久米地区は松山平野のほぼ中央北部に位置する。

旧温泉郡久米村付近の地勢は、高龜山系の南東部から分岐した支脈が南西に延び、明神が森（1216.9m）、福見山（1054m）、観音山（518.1m）、芝が峰（282.2m）と次第に低くなり、久米地区鷹ノ子において八幡山（106m）となり八幡山に連なる低丘陵を経て山地は消滅し、かわって同山系が造成した、鷹ノ子、北久米、南久米、北来住の洪積性台地や微高地と続く。この洪積台地は、芝が峰山麓より流れる撫越川の開拓により浸蝕、あるいは隆起により一部では河岸段丘を造出している。さらに南に続くと洪積性微高地は高さを減じ、小野川付近で沖積平野にかかる。

長隆寺は、同寺より北方300mで-3m、西方200mで-3m、南方200mで-2.5mの等高差を持つ北来住舌状台地のほぼ西端に位置する。

北来住台地の土壤は和泉砂岩の風化堆積したものであり、耕土の下の第2層は和泉砂岩、安山岩などの円礫を含む茶（赤）褐色壤土であり、第3層は黄褐色の粘土質の壤土である。鷹ノ子や北野の一部では黄色や黒色のロームの堆積も一部見られるが、大半は和泉砂岩の風化堆積土である。

〔3〕歴史的環境

松山平野一帯の山地、山麓、洪積台地、沖積平野には縄文時代～古墳時代にかけての遺跡が数多く分布する。これら全てについて述べることは難しく、また長隆寺跡と直接因果関係の無いものも多く、したがってここでは旧温泉郡久米村を中心とし、長隆寺の立置する地域に限定する。

旧久米村内には縄文式土器を出土する散布地が、北久米山田池付近に2か所あるが、いずれも縄文晩期に属するものである。

弥生式土器を出土する地域が、芝が峰山麓と北久米、鷹ノ子、北塙田、北来住の洪積台地に7か所あり、福音地、北久米、高井、土井の沖積平野部に6か所点在する。これらの遺跡からは、石劍、石鏃、石包丁をはじめ壺形土器が多く出土しており、その年代は弥生時代後期に属するものが大半である。上記の地域の中で、特に鷹ノ子宇新畑、同斎院、来住高畑に到る洪積台地は遺物含合層が隨所に見られ、久米小、中学校の敷地内もその一つである。この地域は10年前に土地改良で第3層の黄色粘土を除去した際に、かなり多量の遺物を出土しており現在も諸工事により散発的に出土している。

古墳時代になると、西部より、北久米丸山古墳群、同山田池古墳群、鷹ノ子古墳群、同芝が峰古墳群、同大池古墳群、小野今吉古墳群と続き、山頂、山麓にその數50基を越す古墳が所在する。また洪積性微高地にも15基点在しており、これらの古墳は直徑5～15mの円墳で、内部構造は、横穴式片袖、両袖石室が大半をしめ、これらの古墳からは、金環、玉類、鐵劍、鐵鏃、須恵器をはじめ、方格規矩文鏡、五鈴鏡、擴文鏡を出土しており、円筒埴輪、家形埴輪の出土例も知られている。しかし、これらの副葬品類はいずれも6世紀～7世紀の墳のものであり、6世紀前に逆のばる古墳の確認はされていない。また、いずれもかつて果樹園に開墾中偶

然発見、発掘されており正式調査も無く遺物も散逸したうらみがある。

沖積平野部では高井に全長約60mの前方後円墳「墓辺の大塚」があり、久米中学校東には戦前迄、タンチ山古墳（前方後円墳？）があったといわれ、また南久米東山神社の境内は、かつて巨大な古墳であったことも伺え、当時の豪族の力をしのばせている。

飛鳥時代より律令政治への過渡期にいたると寺院跡等が古代史解明の一端となるが、奈良期の寺院跡の分布は、長隆寺より南へ1.2km南土井字中ノ子に中ノ子廃寺跡、南東へ1.8km高井字せんげじに千軒廃寺跡があり、西へ3.5kmには旧石井村朝生田に朝生田廃寺跡が所在する。
(Map 1-3)
(Map 1-4)

これらの寺院跡は長隆寺跡より出土する古瓦の様式によって関連が認められ、さらに松山平野一帯にそれを求めるならば、松市道後一湯ノ町廃寺跡、同内代廃寺跡、同中村町一中村廃寺跡、
(Map 1-1)
同久谷村上野一上野廃寺跡も関連づけられ、未確認ではあるが、星が岡付近に一ヶ所、平井今吉に一ヶ所、北伊予に一ヶ所古瓦を出土する個所がある。しかし、これらの寺院跡の発掘調査は皆無であり、ただ出土する古瓦においてのみその存在を推定しうるに留まる。またこれらの寺院に使用された瓦の窯跡としては、松市衣山平窯跡、同平井駄馬窯跡、伊予市市場登り窯跡、温泉郡重信町下林伽藍登り窯跡と平野部の周辺に点在しており、現在調査中の砥部運動公園敷地内の窯跡も関連あるものと思われる。
(Map 2)

条里遺構に関しては、久米西部の北久米、南久米住、土井の一帯に明らかに条里に基づく地割が今日も残されている。

米目部小橋が居住し、代々久米氏の生活根拠地と考えられる久米郡は、律令政治下では石井、天山、神戸、余戸、吉井の5郷に分割されており、石井、天山、吉井の名は現在も継承されており、神戸、余戸、2郷については旧久米村の地域とする説が出されている。長隆寺の位置する北久米住は、久米村のほぼ中央に位置する。

現在の長隆寺は黄檗宗に属し、京都万福寺の末寺で、平安時代末期の作風を残す薬師如来を本尊とする本堂、観音堂、山門、南門、庫裡を有し、境内には往古の伽藍に使用せられたと思われる礎石が22個点在する。
(Fig 1)

注1. 国道11号バイパス線上にも数多く分布している。

注2. 伊予郡砥部町、松山市にまたがる一帯で窯跡が7~8基点在する。

III 遺構

(1) 塔跡

1 遺構の状況

塔跡と伝承されている地域は、約200mにわたり土盛がある491番地で、水田面より平均1.5m高くなっています。サクラ、コウヤマキなどの樹木が茂り、塔の心礎石と思われる巨大な礎石など、計4個が点在している。これらの礎石は、いずれも移動しているものであり、かつその下層は擾乱層であることが予備調査で確認されており、発掘は基壇の破壊を考慮し、基壇上面ま

でとし、基壇下部構造については、東西のいずれかの深掘トレンチで確認することにした。なお水準測量のため、11号線久米交差点の水準点より移動し境内に 40.30m を設置し、レベルポイントとした。

トレンチは土盛のほぼ中央に十文字に幅1.5 mで設定し、それ以後は検出した礎石の位置する方位にしたがって拡張した。

発掘の結果、トレンチにおける土層は、第1層—表土（5~10cm）、第2層—褐色腐植土（15~20cm）第3層—茶褐色粘性土（40~50cm）で灰を多く含み、多くの瓦片を堆積する擾乱層である。トレンチの中央部において、表面下75cmで、第3層とは全く異なる黄色の固い粘土がトレンチ内全面に露呈した。これは基壇上面と考えられ、ブロック状に焼土も残存していた。

東西トレンチの中央部では黄色粘土に混じり、同粘土の酸化した茶色の粘土が土塊状に検出され、基壇面が掘られていることが認められた。

トレンチ拡張の結果、8個の礎石を検出した。これらの礎石の形状は別記の表に示す。調査の便宜上、北西隅柱礎石をT1とし、南東隅柱礎石をT16とした。

塔礎石一覧表

No.	T1	T2	T3	T4	T5	T6	T7	T8	T9	T10	T11	T12	T13	T14	T15	T16
長軸 cm			113	105	136					98	90	72		118	94	
短軸 cm			61	92	78					78	87	70		88	70	
柱座直径 cm											60					
備 考	未 標 記 の木 の下 に位 置す る。	未 標 記 の木 の下 に位 置す る。	和泉砂岩、 表面研摩、 据え付石三個。	和泉砂岩、 表面研摩、 二石	欠 失	欠 失	未 標 記 の木 の下 に位 置す る。	欠 失	和泉砂岩、 表面研摩、 火災により剥離	納穴径24 cm、深さ2 cm、和泉砂岩	欠 失	和泉砂岩、 表面研摩	和泉砂岩、 表面研摩	和泉砂岩、 表面研摩	欠 失	

これらの礎石の水平差は±6 cm内であることが判明した。

心礎石は、和泉砂岩の2個の切石からなっており、両方の石を縛るための溝が、両端に切ってある、特徴のある寄せ合せ形式であり、その実測値は、東西1.62m、南北1.55m、高さ0.67mで、心礎柱座直径は79~80cm、心柱を受ける柱穴（納穴）は直径42cmであり、柱穴内部には

何の造り出しある見られない。(Fig 2)

T 5 碓石より西へ1.5 mで黄色粘土は消滅し、基壇の西端であることが判明した。T 8 碓石より東は、高野横の大木があるためトレンチの設定は不可能であり、T 12 碓石より東へトレンチを設定して黄色粘土を追求した結果、T 12 碓石より東へ1.6 mで黄色粘土が消滅する個所を確認。基壇東端と思われる。

さらに基壇の構成を調査するため、同個所に、幅1 m、長さ2.5 mのトレンチを設定、深さ2 mまで深掘した。その結果、黄色粘土と白灰色の凝塊化した灰とが互層に積築されており、基壇上面より

-95cmより下部においては黒色土層が認められ、弥生式土器片が多数出土しており、この黒色土は上面に礫を含むことから弥生期の包含層（旧地表か第2層）と思われる。トレンチ内においては、羽目石、束石等の基底部石の検出は見られなかった。

T 4 碓石より東では、やはり1.5 mで黄色粘土が消滅することが確認できたが、同砲石より北では、1.3 mあたりから擾乱がはなはだしく確実性を欠くが、黄色粘土は下降しており、1.8 mでは全く検出されなかったので、やはり1.5 mあたりで基壇の北端とみてさしつかえないであろう。

以上の結果、基壇の高さ約1 m、基壇東西一辺長は9.75 mと判明し、この一辺長間に4個の礎石を配設しており、かつ礎石間の距離が近似していることから、この遺構上に建造された堂宇は塔であると考えるのが最も妥当である。(Fig 3.4 参照)

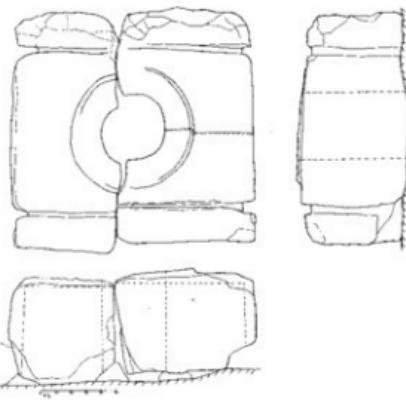
2 遺構の考察

塔の規模について、基壇一辺長 南北においては不確実ではあるが、東西において9.75 mあり、ほぼ10m正方と考えてさしつかえない。検出した礎石8個は塔プランの復原にはさしつかえないが、初層一辺長においては若干の疑問点が生ずる。

東西初層一辺長は、T 5 ~ T 10 ~ T 11 ~ T 12 をもって、それぞれの柱心間を計測すれば、1.94 m、1.95 m、1.93 m計5.82 mとなる。しかし、南北初層一辺長、T 3 ~ T 5 ~ T 11 ~ T 15 では、1.98 m、1.96 m、2.48 m計6.42 mとなり、その差60 cmを生ずる。T 14、T 15両礎石の据え付け部では黄色粘土が見られず、同粘土が酸化したと思われる茶褐色粘性土を土塊状で検出しており、両礎石の移動も考えられるが、一応、初層一辺長は東西間の5.82 mと理解したい。

また、脇の間と中の間とを比較するに、脇の間を1として中の間を比較した数値が多い程、

Fig 2 心礎石実測図



心礎石実測図

（左）T 5 T 10 T 11 T 12

（右）T 3 T 5 T 11 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T 14 T 15

（中）T 14 T 15

（左）T 14 T 15

（右）T

建立時期は古いとされている。長隆寺塔跡においての数値は、1、または1を割っており、時代考察の一資料と思われる。^(注1)

塔跡に使用された尺度であるが、柱間長、初層一辺長、基壇一辺長の数値を高麗尺（35.67cm）と唐尺（27cm）のいずれかに比例さすと、柱間長と初層一辺長は高麗尺の5.5尺、16尺に該当しうるが、若干の誤差は認められる。後述の講堂跡の柱間長や、塔跡との相互関係から、塔跡も高麗尺の使用が考えられる。

塔の規模については、石田茂作博士の研究によれば、初層一辺長が心礎石柱座直径の7～8倍のものは5重の塔であり、心礎石柱座直径の40倍前後が塔高とされている。この論説を長隆寺塔跡にあてはめると、

$5.82m \div 0.8\text{ m} = 7.2\text{ 倍}, 0.79m \times 40 = 31.6m$ となり、5重塔、塔高31m前後であることが推定される。^(注2)

心礎石の旧位置については、T 6（欠）、T 7（欠）、T 10、T 11のいわゆる四天柱礎石の間隙から、半地下式とは考え難い。基壇上面で発掘を止めているので明確ではないが、四天柱礎石の内、すなわち旧心礎位置付近は、黄色粘土の酸化したと思われる茶色粘土が土塊状で検出されており、黄色粘土も他の部分と比してかなり軟化しており、地下式心礎石の抜き取った形跡とも思われる。

*基壇一辺長、初層一辺長、旧心礎位置など不明確な点が多い。これはトレンチ掘りによる調査であるため、今後の全面発掘による調査が望まれる。

注1、 法輪寺1.44、法隆寺1.43、四天王寺1.33、法安寺1.12

注2、 伽藍論考 石田茂作 S. 23.

（2）講堂跡（推定）

伽藍様式の上で、塔より東に金堂、そして両者の中央北部に位置するのが講堂、講堂の正面南部に中門が位置する形式が法隆寺式であり、全国にもその例は少なくない。長隆寺跡の場合、塔跡の位置、付近の地形から法隆寺式伽藍配置ではないかという推定に基づいて調査を始めた。

現在の本堂は寄せ棟本瓦葺きであるが、その方向において庫裡とは少し差を生じている。本堂の正面、すなわち西棟をささえる4本の柱の礎石には、花崗岩の小切石礎石が使用されているが、注意すべきはその内3個の小礎石の下にさらに大きな和泉砂岩の自然石が使用されており、表面も研磨調整され、礎石と考えられる。このような二重礎石の例は余りみられない。これらの礎石間を実測するに礎石番号8～9間が2.86mあり、これは高麗尺の8尺=2.85mに相当する。9～10間には小切石礎石があるが、その下には明らかに礎石を抜き取った形跡が見られる。9～小礎石間は3.70m、小礎石～10間は2.85mあり、これもそれぞれ高麗尺の10尺、8尺に相当し、3礎石の持つ方位は磁北より東へ4°01'である。さらに本堂の内陣、北西、及び南西の隅隅柱礎石の下にも抜き取り形跡が見られ、9と小礎石から東に、それぞれ3.65m、3.70m

に位置し、高麗尺10尺と考えられる。これらのことから、高麗尺8尺、10尺、8尺の何らかの建造物が存在していたことが考えられる。

高麗尺8尺、10尺の数値で8、9、10より西ヘトレンチを設定して礎石等の検出を試みた。本堂西側の一帯は本堂基壇より20cm程低くなっているため、礎石の抜き取った形跡すらも明確にする事はできなかった。が、トレンチ内の土層は、第1層茶褐色粘土、第2層黄色粘土で、第1層と第2層間にはブロック状に灰を含んでおり、地表下50cmで黒色土層を検出した。この層位から本堂前一帯は旧遺構、即ち基壇であると考えられ、その範囲は基壇確認トレンチの結果、本堂、山門、観音堂の一帯であろう。

各トレンチは全くの無遺物であり、僅かに灰の中より木炭の小片を3個検出したにすぎない。庫裡の西側は、現在畠となっているが、耕作時に石組が存在するということで、確認の為に、畝と畝の間に、幅40cm、長さ4mのトレンチを設定した。

耕作物があるので思うように掘ることはできなかつたが、地表下30cmで、平均 $20 \times 15 \times 10$ cm大の河原石（和泉砂岩、安山岩）を列状に18個検出した。石列の間からは湧水が認められ、排水施設と思われるが、トレンチ幅が狭いため確認はできなかつた。

この石組を東に延長し、後述の伽藍中軸線との交点を求めれば、No.10礎石より5.28mの数値を得た。一応高麗尺15尺に相当するが、この遺構が講堂跡と関連するかは不明である。

以上のことから、現本堂は旧遺構を利用して建立されたものであり、本堂付近に点在する礎石はおそらくこの遺構より除去されたものであろう。この遺構の規模、また講堂跡であるか否かは不明確ではあるが、塔跡より、北に位置する遺構としては講堂跡である可能性は十分考えられる。

〔3〕 伽藍考察

塔跡と講堂跡の一部しか確認されてない状態であるので、全ての伽藍配置の想定は無理としても、ある程度の規模の推定は成り立つ。

寺院の伽藍諸様式（飛鳥寺式、四天王寺式、法隆寺式、法起寺式等）はいずれも、伽藍中軸線を設定し、それを基準に一定の尺度を持って堂宇が配置建立されている。

講堂跡の礎石No.8～10は方位（N→E 4°01'）を持っており、これが講堂跡の方位であると共に伽藍中軸方位と理解しえる。これを南に延長し、塔跡の中心点から塔跡の方位（N→E 7°12'）を90°東に振り、延長し両者の交点を求める。その結果、塔中心点より交点迄の実測値、17.79mを得た。これは高麗尺50尺（17.83 m）に相当し、注目すべき数値である。この交点からNo.8礎石中心迄の実測値を求めるに35.75 mを得た。これは高麗尺100尺（35.67 m）に相当すると考えられる。この高麗尺50尺、100尺の数値から高麗尺50尺が一定の基準とするならば、No.8～10の方位は伽藍中軸線であり、諸堂宇の位置を求めるにも十分可能である。

塔跡より西に、16～18mまでの間で、石組、瓦が出土していることも考慮するならば、長隆

寺跡の使用尺は高麗尺で、高麗50尺が基準尺と考えられる。

(Fig. 6)

IV 出土遺物

塔跡、講堂跡、及び付近一帯の水田などから出土した遺物は、弥生式土器片20、軒丸瓦片11、軒平瓦片23、平瓦片286、丸瓦片164であるが、いずれも破片で完形品は無い。弥生式土器片については、塔跡東部深掘トレンチ内の最下層、黒色土より検出したものであり、いずれも少破片であり省略する。瓦片については主に塔跡上の第2層を中心とした擾乱層に堆積していたものであり、原位置を保つ瓦片は認められなかった。

(1) 瓦

出土した瓦類は大別して、軒丸瓦4種、軒平瓦3種、丸瓦2種、平瓦4種であり、計484点にのぼる。

出土瓦一覧表 ()書きは同種の瓦からの推定

種別	文様	花弁、弁数	中房径 cm	蓮子数	直 径 cm	焼成	備考
No.1 軒丸瓦	蓮華文	素・(8)	(3)	(7)	(18)	硬	
No.2 "	"	複・8	6	19	17	硬	波状線有り 内区線無し
No.3 "	"	複・4	3.5	5	15	硬	波状線有り
No.4 "	"	複・6	4	7	17	軟	

	文様	額	額幅 cm	内区線	全幅 cm	焼成	備考
No.5 軒平瓦	4重弧文	無	3.5	無	(約25)	硬 灰釉	ヘラ書き 弧文
No.6 "	2重弧文	"	3.5	"	—	"	"
No.7 "	唐草文	"	4	"	—	軟	遍行唐草
No.8 "	"	有	5.5	有	—	硬	均整唐草

	種別	布目	色	焼成	備考
丸瓦	行基	有	黒 灰	硬	無段、止め穴有
"	本瓦	"	白 灰	硬	有段

	種別	布目	色	焼成	備考
平瓦	格子字(斜正文)	有	黄 灰	軟	格子の大小有り
"	条線文	"	白 灰	硬	両端二面切り
"	繩目文	"	黒 灰	硬	両端二面切り
"	荒繩目文	"	茶	硬	四隅端削除

〔2〕出土瓦の考察

1 軒丸瓦

- ・軒丸瓦No.1—(Fig. 9)

少破片であるが素弁蓮華文である。以前に出土している同瓦(Fig. 9-1・9-2)から、飛鳥時代特有の素弁形式で、蓮弁も力強く盛り上っており、同時代の瓦と推定しうる。同種の瓦が湯ノ町廃寺跡より出土している。(Fig. 9-3)伊予における素弁蓮華文軒丸瓦の出土は少なく、この他では法安寺の出土例があるのみである。

- ・軒丸瓦No.2—Fig. (10, 10') P.L. 19

いわゆる法隆寺式軒丸瓦であるが、原形たる法隆寺の軒丸瓦と比較するに、蓮弁が少し細長くなり、中房、蓮子等の作りも粗雑であり、内区線も無い。愛媛への手法の伝播を考慮すれば奈良時代前期と考えられる。この瓦と全く同じ手法で同版による瓦が湯ノ町廃寺(Fig. 10-1), 内代廃寺より出土しており、同種のものが湯ノ町廃寺(Fig. 10-2), 内代廃寺(Fig. 10-3), 中村廃寺(Fig. 10-4), 朝生田廃寺(Fig. 10-5)より出土している。

- ・軒丸瓦No.3—Fig. 11・11'・11-1・11-2・11-3・11-4・P.L. 20, 21)

手法において、蓮弁の力強さ、跳ね返りが無く衰退が見られるが、十字四弁、波状線等、幾何学的文様を残している。この文様は全国にもその例は余り無い。同瓦は長隆寺跡からのみ出土するが、これとよく似た手法を持つ瓦が、朝生田廃寺(Fig. 11-5), 温泉郡重信町伽藍跡(Fig. 11-6)より出土している。奈良時代後期—平安初期に位置づけられる。

- ・軒丸瓦No.4—(Fig. 12, 12') (P.L. 22)

この瓦の蓮弁は平安時代初期～中期の複弁瓦の典型的な弁形をしており、蓮弁の作りも粘土の質も砂分が多く粗雑である。同種の瓦が、湯ノ町廃寺(Fig. 12-1), 内代廃寺(Fig. 12-2), 松山市衣山平廃跡(Fig. 12-3)より出土している。

2 軒平瓦

- ・軒平瓦No.5～6 (Fig. 13, 13') (P.L. 23)

重弧文(4重弧、2重弧)軒平瓦であるが、いずれも顎が無く、弧文は版型によらず重ねたヘラによるものであり、顎面に灰釉を付着する。平瓦部の両端は二面切り(図)であり、奈良時代の瓦と推定しうる。松山地方では法隆寺式軒丸瓦を出土する寺院跡からは、この四重弧文軒平瓦が出土しており一対をなすものと考えられる。同種の瓦は朝生田廃寺(Fig. 13-1)、法安寺よりも出土している。(Fig. 13-2)

- ・軒平瓦No.7—(Fig. 14) (P.L. 24)

唐草文ではあるが、均整、遍行のいずれかも不詳、年代は不明。

・ 軒平瓦No.8—(Fig 15) (PL25、26)

唐草文の一種類と思われるが、異形唐草である。一部分であるので断定し難いが、平瓦に押印してあった文様(Fig 15')や、同種の瓦を出土している千軒庵寺(Fig 15—1)、松山市衣山平窯跡(Fig 15—2)の軒平瓦から中央に心飾をもった均整唐草である事が伺える。年代は平安時代初期～中期と思われる。

3 丸瓦 (PL27、28)

出土した丸瓦片は2種類あり、段を持つ本瓦と、段を持たない行基瓦があり、いずれも内側に布目を付す。

4 平瓦 (Fig 16～21)

出土した平瓦片は裏面の文様から、広斜格子、狹斜格子、条線、繩目、荒繩目と多種にわたっている。特に荒繩目文は長隆寺独特の出土瓦であり、四隅をへらで削除しており特徴のある形である。いずれも表面に布目を付す。

V 総 括

(1) 出土瓦の分布と伝播

長隆寺跡出土の文様瓦と同種の瓦を出土する寺院跡や窯跡が、松山平野一帯に点在しており、これらはその瓦をもって相互関係が成立する。(Fig 23)

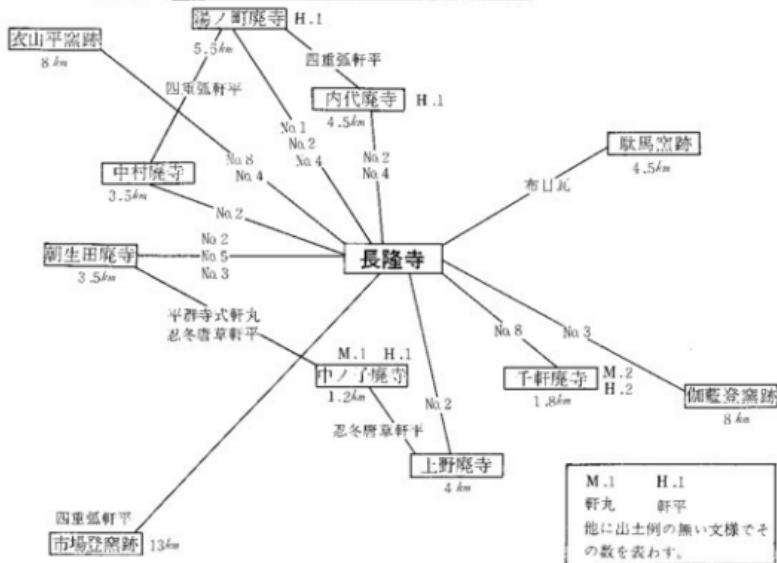
No.2の法隆寺式軒丸瓦に関しては、長隆寺を含め5ヶ寺院跡より出土しており、特に湯ノ町廃寺跡、内代廃寺跡より出土する同瓦は、その中房の径、蓮子の位置、また、版型の割れ目にによる突起など全く同一であり、同版による製造であることが判明し、同一造瓦工房による製作、配布が考えられ、奈良時代の松山地方における造瓦師の技術、生産、配布の過程を考察する注目すべき資料である。

No.4の軒丸瓦に関しても、衣山窯跡から3ヶ寺院へ、No.8の軒平瓦に関しても2ヶ寺院に配っている。No.3の軒丸瓦に関しては、同一ではないが、手法に共通点を持っており、平安時代に至っても、生産過程は同一と見てきしつかえない。現在においても造瓦は特殊技術であり、当時においては政治支配単位の都を越えて、瓦の供給がなされたことが伺える。

No.2の法隆寺式軒丸瓦の窯跡は現在の時点では発見されておらず、今後の調査、研究に待ちたい。同瓦の原型は、大和法隆寺のそれであることは一目瞭然である。

奈良時代において、辺境の地である松山地方になにゆえ製法が伝播していたか、造瓦技術と共に興味ある問題である。これを直接うらぎける文献は無いが、天平十九年(747)の「法隆寺伽藍縁起并流記資財帳」(文献1)には、伊予国に14ヶ所の正倉(庄)があり、松山平野部では、

Fig 23 長隆寺跡出土瓦分布及び関連図



松山平野寺院跡一覧表

寺院跡名	所 在 地	奈良期行政区分	表面上の道 横	現 状	備 考
湯ノ町廃寺	松山市道後祝谷1丁目 田伊子鉄道駅アランド 一帯	温 泉 郡	無し	宅地化	発掘不能 付近の小川より布目瓦の出土あり 〔Map 1-1〕
内代廃寺	松山市道後土手2丁目 鐵安寺前一帯	温 泉 郡	無し	宅地化	発掘不能 僅かに残った水田内に瓦片が残存する。 〔Map 1-2〕
中村廃寺	松山市中村町4丁目 素我神社一帯	温 泉 郡 橘 郡 (立 花)	無し	宅地化	発掘不能 境内は出土物無し 〔Map 1-3〕
朝生田廃寺	松山市朝生田 旧善宝寺跡 墓地	久米郡石井郷	無し	水 田 一部墓地	墓地付近より掘り出した塔心礎石は、善宝寺内に有り、柱礎径45cm、梢穴径22cm、排水溝2本有り、原位置不詳、墓地に布目瓦あり 〔Map 1-4〕
千軒廃寺	松山市高井土居之内小 字せんげじ	久 米 郡	無し	水 田	発掘可能 須恵土師を出土 〔Map 1-7〕
中ノ子廃寺	松山市南土居字中ノ子	浮 穴 郡	無し	水 田 一部墓地	発掘可能 掘り出された礎石は五十鈴神社に3個有り 〔Map 1-5〕
上野廃寺	松山市莊原字上野 大宮八幡社内	浮 穴 郡	無し	神社境内	発掘可能 境内よりは出土例無く、付近の小川より出土例あり 〔Map 1-6〕

伊予郡4か所、温泉郡3か所、和氣郡2か所、浮穴郡1か所の正倉（莊園）があったと記されていることから、久米郡にその正倉の記載が無いとしても、かなり松山地方と法隆寺との交流はあったことが伺え、都に上った地方豪族達が目のあたりに仰いだ寺院や、瓦を彼らが建立しようとする氏寺に技術導入したことは十分考えられる。

※ 松山地方では法隆寺式軒丸瓦の系列と、平群寺式軒丸瓦（Fig22.22-1）の系列が認められ、前者には四重弧文軒平瓦が、後者には忍冬唐草文軒平瓦がそれぞれ一対をなすものと考えられる。

〔2〕 長隆寺建立の時代背景

長隆寺建立の時代は、No.1、No.2の瓦から、奈良時代前期の頃とみてさしつかえない。No.1の素弁軒丸瓦は不明確であるとしても、No.2の法隆寺式軒丸瓦は、法隆寺（若草伽藍）の焼失後再建された現法隆寺西院伽藍に使用された瓦の系列に属しており、法隆寺再建は遅くとも710年前後と考えられることから、伊予へのその手法の伝播を考慮すれば、730年代と考えてさしつかえない。

文献上、長隆寺の初見は、「伊予国分寺文書」（文献2）の免田注記の寺田においてである。しかし、長隆寺に関しては温泉郡中島町に忽那氏の建立したといわれる長隆寺があり、いずれをさすか確実なる史料は無いが、当時の地理的条件、併記の他の寺院の寺田の規模から久米長隆寺を指すものと思われる。しかし遠長年間以前の長隆寺に関しては全く史料無く不明である。長隆寺の存続は平安、鎌倉と続いたことは伺えるが、境内の地蔵尊の碑文から、享保年間には礎石も散乱し、ほぼ現状の廃寺に近い状態になっていたと思われる。

松山平野には奈良時代の瓦を出土する寺院跡が、長隆寺跡を含めて8か所点在するが、これらの存在を直接しめす文献史料は全く無い。したがってこれらの寺院跡が全て七堂を備えた伽藍であったか否かは、出雲風土記（文献3）の記載例からも疑問である。また、1郡内に数か寺の建立は中央における氏寺の乱立を思わしめる状態である。

これらの寺院の存在を示す間接的文献として、「伊予風土記逸文」（文献4）記載の天山の項の「久米寺」が考えられる。伊予風土記の編さんがいつ頃なされたかは明確では無いが、出雲風土記と同じく天平十年（738）前後に進上したものと考えるならば8か寺院跡のいずれかは久米寺に既当することが考えられる。

久米寺はその名の如く、久米郡内に位置し、居住せる久米氏（文献5）によって建立された氏寺と考えるならば、朝生田廃寺跡、長隆寺跡、千軒廃寺跡は久米寺に比定しうるが、久米郡の中央に位置し、天山に近く、かつ6～7世紀の古墳群の集中度など、地理的、歴史的に推察すれば、長隆寺はその最も可能性を持つ廃寺跡として考えたい。

◎ 文獻

1 法隆寺伽藍緣起并流記資財帳 〔寧樂遺文〕

合庄倉割拾肆口

伊予国拾肆处 神野郡一處 和氣郡二處 温泉郡三處 浮穴郡一處

風速郡二處 伊予郡四處 骨奈鳴一處

天平十九年二月十一日

2 伊予国國分寺文書

伊予国神社仏閣等免田注記

〔免田、寺田の項目より抜粋〕 建長七年十月

寺田五十三丁二反六十步

國分寺 十丁二反

法花寺 二丁四反二百四步

儀安寺 四丁二反小

法安寺 七反三百五十步

*長隆寺 七反三百五十步

3 出雲風土記

〔続群書類從第三十三〕

意宇郡

○新造院一所_在山代鄉_中——飯石郡少領出雲臣弟山之。所造也。

○新造院一所_在山國鄉_中都家東南廿一里

一百二十步_建一立三層之。塔也山國鄉人置

部根緒之所。造也

○幡縫郡一所——大領出雲臣太田之建立

○出雲郡一所——旧大領置部臣布弥之建立

○神門郡二所——鄉人建立

○大原郡一所——大領勝部君虫麻呂建立等の記載が見られる。

4 犀日本紀 卷第七述義三第一下〔国史大系本〕

天香山

伊予國風土記白伊与郡自_郡家_以東北在_

天山_所。名_天山_由者、倭在_天加具山_自_天

々降時二分而以片端者天一降於倭國_、以

片端者天_—降於此土_回謂_天山_本也、其御

影敬礼奉久米寺

5 正倉院文書 〔寧樂遺文〕

写書所解 申願出家人事

合廿七人

久米直熊鷹年五十
伊予國久米郡平山郷戸主 即勞一年

天平二十年四月廿五日

◎ 参考文献

- | | | |
|------------------|---------|-------|
| ・久米部考 | 喜田貞吉 | T. 6 |
| ・伊豫史精義 | 景浦直孝 | T. 13 |
| ・飛鳥時代寺院址の研究 | 石田茂作 | S. 11 |
| ・伊豫の法安寺について | 鶴久森経峯 | S. 12 |
| ・総合古瓦研究 | 鶴故郷舎 | S. 13 |
| ・古瓦集英 | 岩井孝次 | S. 13 |
| ・伊豫国分寺(国分寺の研究下巻) | 鶴久森経峯 | S. 13 |
| ・伽藍論攻 | 石田茂作 | S. 20 |
| ・世界考古学大系IV | 平凡社 | S. 33 |
| ・久米村誌 | 久米村誌刊行会 | S. 40 |
| ・全国遺跡地図(愛媛) | 文部省 | S. 40 |
| ・日本の考古学Ⅲ | 河出書房 | S. 42 |

◎ 参考資料提供者一覧 (数略)

番号	所蔵者	番号	所蔵者
Fig 9-1	藤崎良本	Fig 11-6	森正史
" 9-2	雄新中学校	" 12-1	藤崎良本
" 10-2	石手寺	" 12-2	三好保治
" 10-3	石手寺	" 12-3	藤崎良本
" 10-4	藤崎良本	" 13-1	善宝寺
" 10-5	善宝寺	" 13-2	愛大附属中学校
" 11-1	長隆寺	" 15-1	藤崎良本
" 11-2	愛媛大学	" 15-2	藤崎良本
" 11-3	久米小学校	" 22	石手寺(善宝寺所有)
" 11-5	善宝寺		

・ おわりに

このたび松山市教育委員会社会教育課のご厚意により、本調査を松山市埋蔵文化財報告書IIIとして刊行することになり喜びにたえません。

本調査を開始してから、はや9年の年月が流れ、その間に松山平野においては諸開発事業によって、弥生、古墳等の遺跡が破壊されようとしております。その開発の波を最も受けているのが、広範囲な発掘面積を必要とする寺院跡であると思われます。長隆寺付近も宅地化が進み、調査を続行することが不能になりつつあります。

調査は樹木を枯らさないためにトレーナーによるものであり、不備、不足があることをお詫びいたします。発掘にあたり、心よく承諾して下さいました閔御住職、檀家の方々、また資料作成にあたり御協力頂きました藤崎良本氏をはじめ諸氏に本紙面をかりまして、お礼申しあげます。

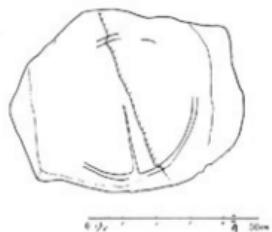
昭和49年3月 温泉郡川内中学校教諭

大山正風

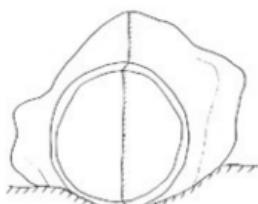
Fig. 7 塔、講堂跡礎石実測図



Fig 8 境内礫石実測図



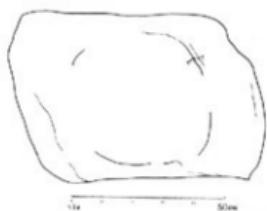
14番礫石



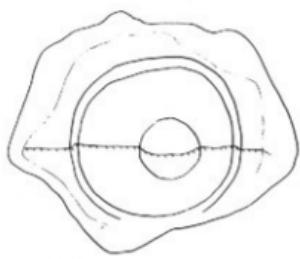
15番礫石〔倒置状態〕



21番礫石〔倒置状態〕



17番礫石



22番礫石〔1967.8現在所在不明〕

Fig 9～22出土瓦実測図

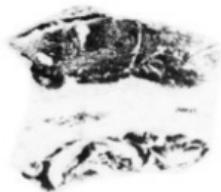


Fig 9

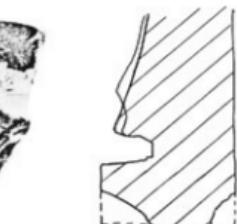
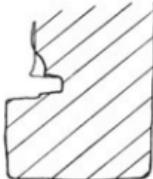


Fig 9-1

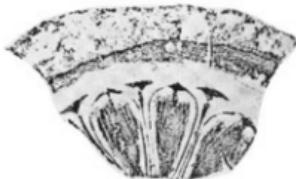
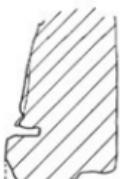


Fig 9-2



石田茂作氏飛鳥時代寺院址の研究
版第三二一八湯ノ町発寺より



Fig 9-3

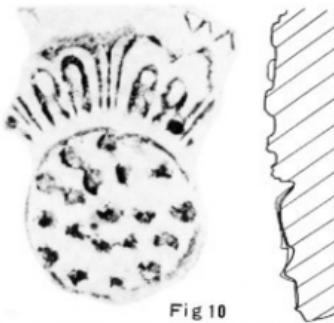


Fig. 10

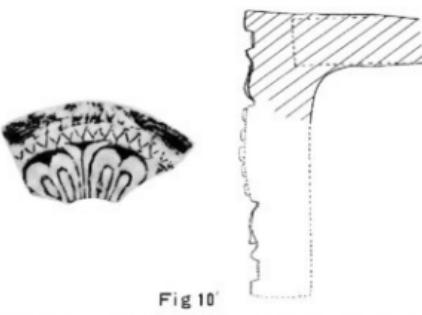


Fig. 10'

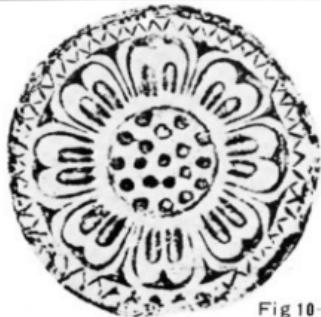


Fig. 10-1

石田茂作氏
飛鳥時代寺院址の研究
図版第三二八
湯ノ町鹿寺より



Fig. 10-2

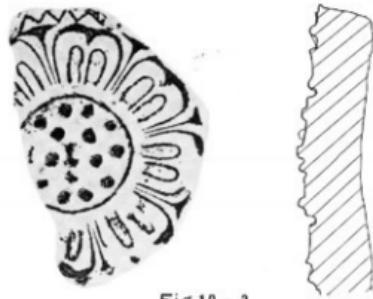


Fig. 10-3



Fig. 10-4



Fig. 10-5

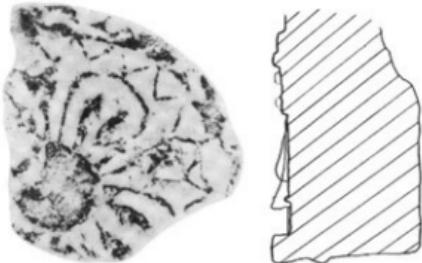


Fig. 11



Fig 11'

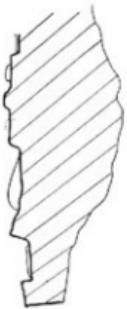


Fig 11-1

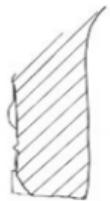
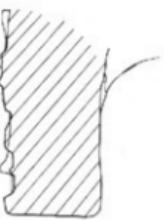


Fig 11-2



Fig 11-4

復原

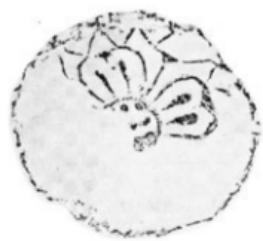


Fig 11-5



Fig 11-6

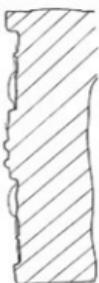


Fig 12



Fig 12'

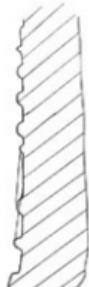




Fig 12- 1

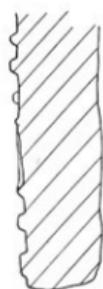


Fig 12- 2



Fig 12- 3

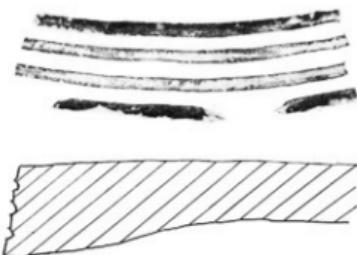


Fig 13



Fig 13- 1

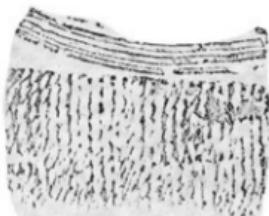


Fig 13- 2

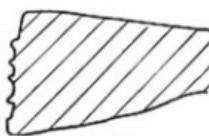


Fig 14

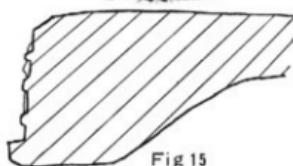


Fig 15



Fig 15'

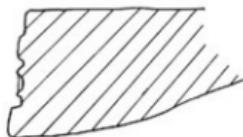


Fig 15-1



Fig 15-2



Fig 16



Fig 17



Fig 18



Fig 19



Fig 20

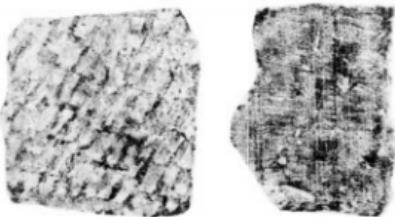
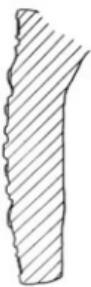


Fig 21



Fig 22



石田茂作飛鳥時代寺
院址の研究図版より



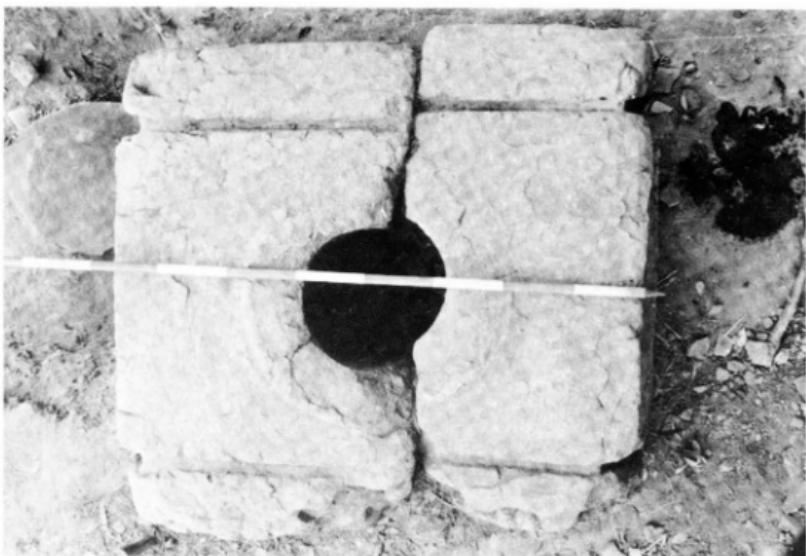
Fig 22-1



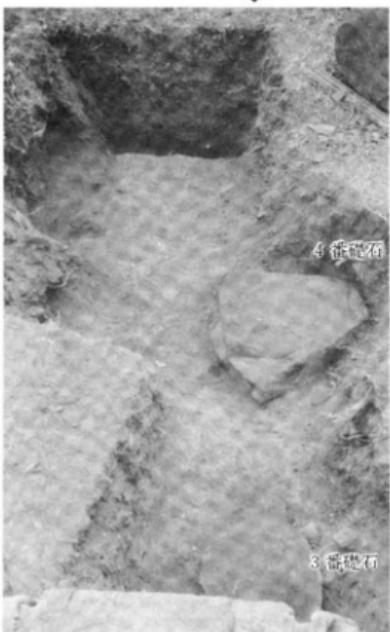
P L1 長隆寺全景（西より）



P L 2 心礎石



P L 3 基壇東端部 ↓



基壇北端部

P L 4



P L 5 塔跡(北より)



P L 6 心礎石

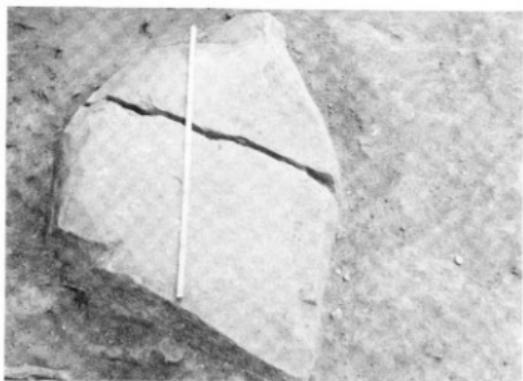


P L 7 心礎石

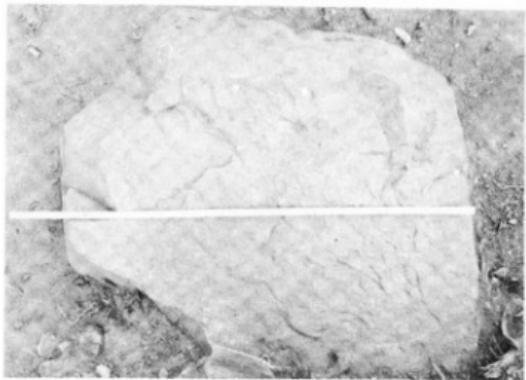


3番礎石

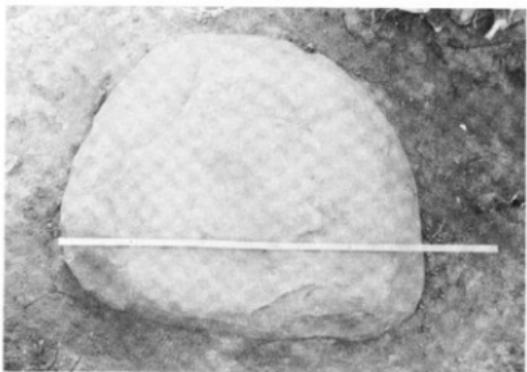
P L 8 5番礫石



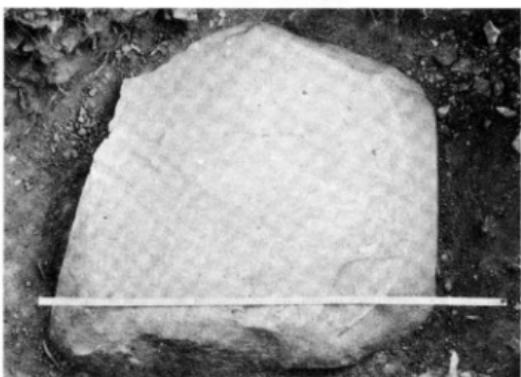
P L 9 10番礫石



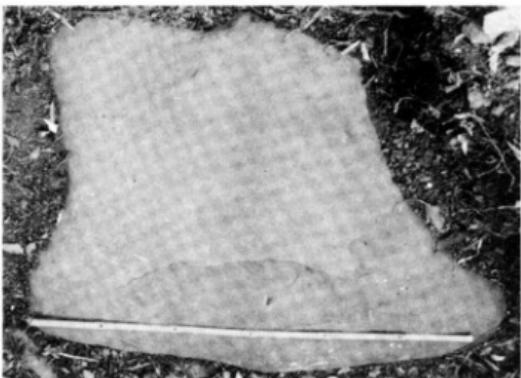
P L 10 11番礫石



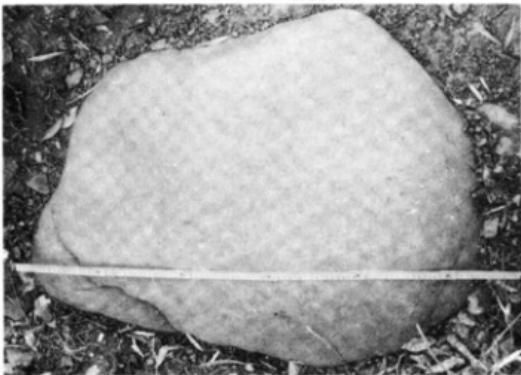
P L11 12番礫石



P L12 14番礫石



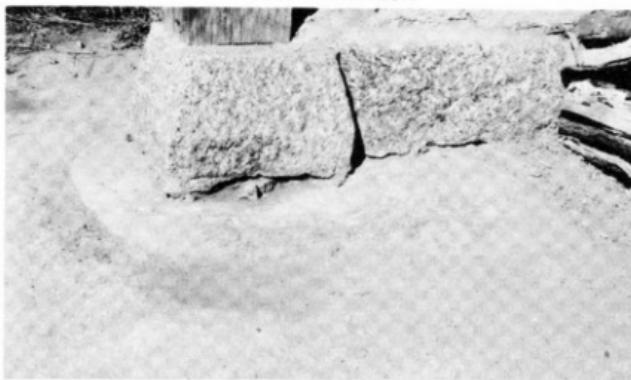
P L13 15番礫石



P L 14 基壇東部トレンチ



P L 15 境内 8 番礎石



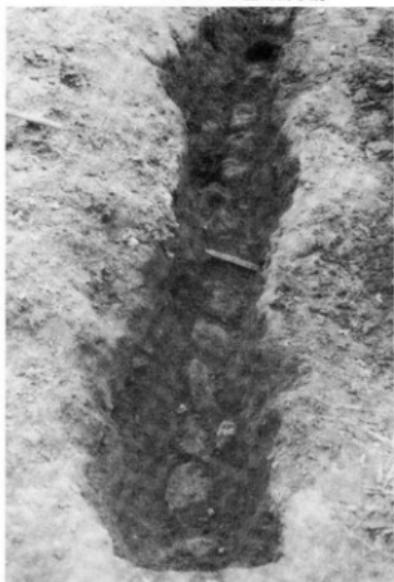
P L 16 境内 9 番礎石



P L17



P L18 本堂南排水溝



L P 19



P L 20



P L 21



P L 22



P L 23



PL 24



PL 28



PL 25



PL 27



PL 28

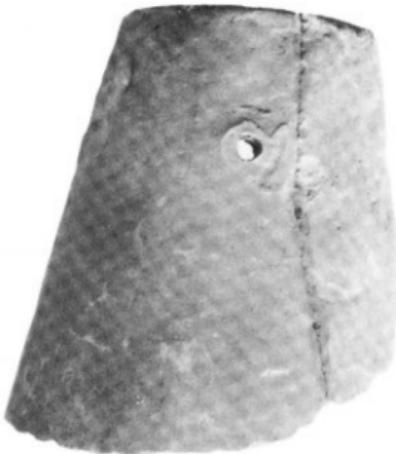


Fig 1 長隆寺跡付近測量図



Fig. 6 伽藍總圖



Fig 3 塔跡実測図

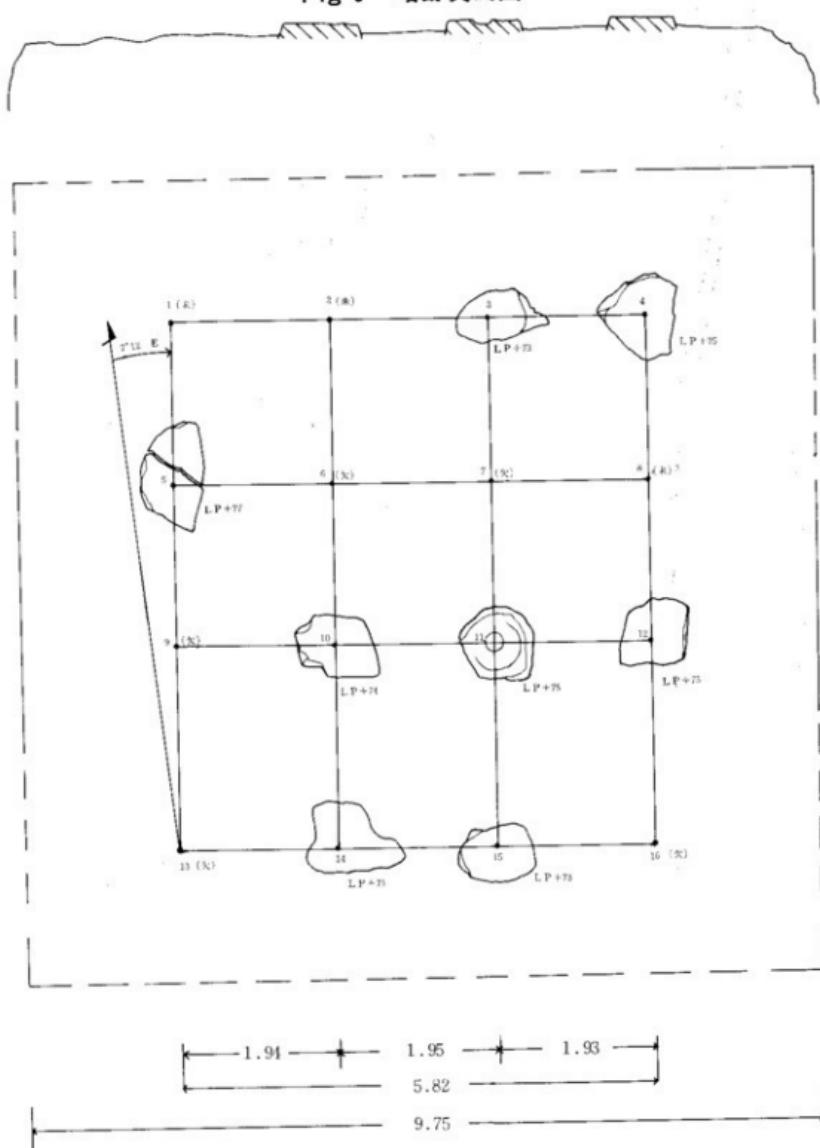


Fig. 4 基壇東部トレンチ断面図

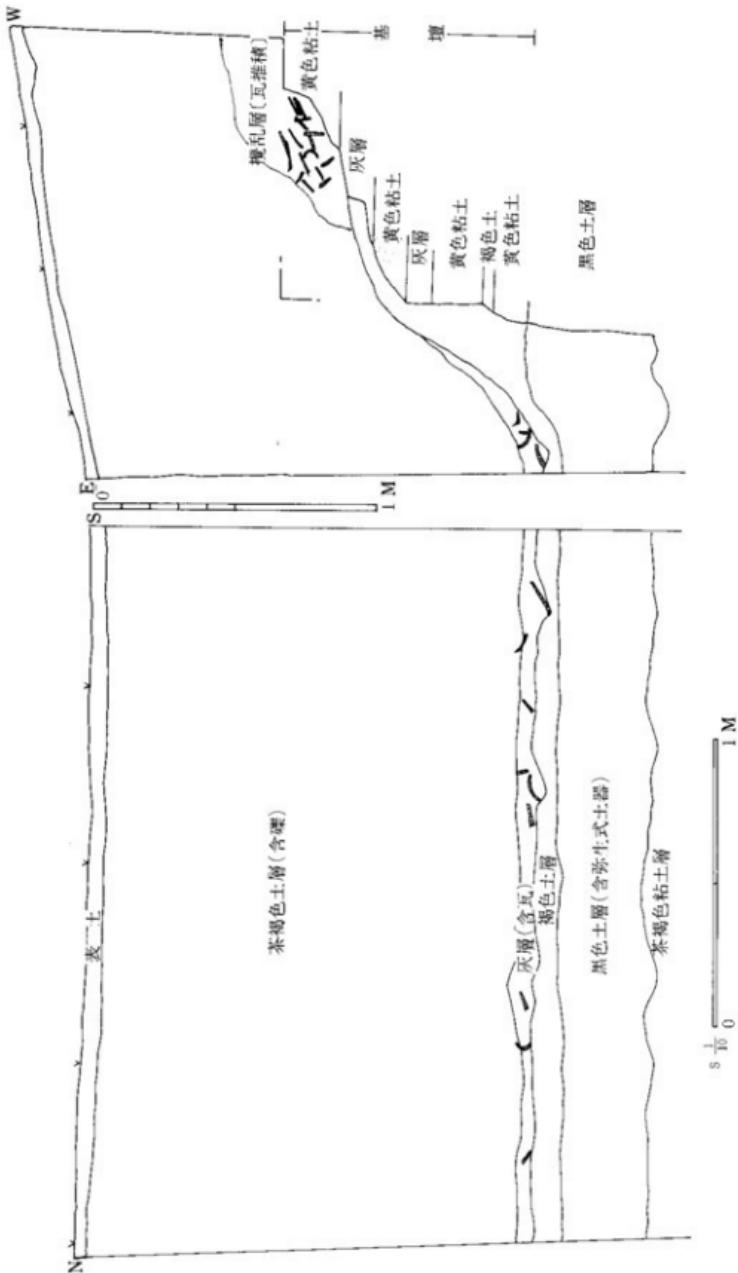
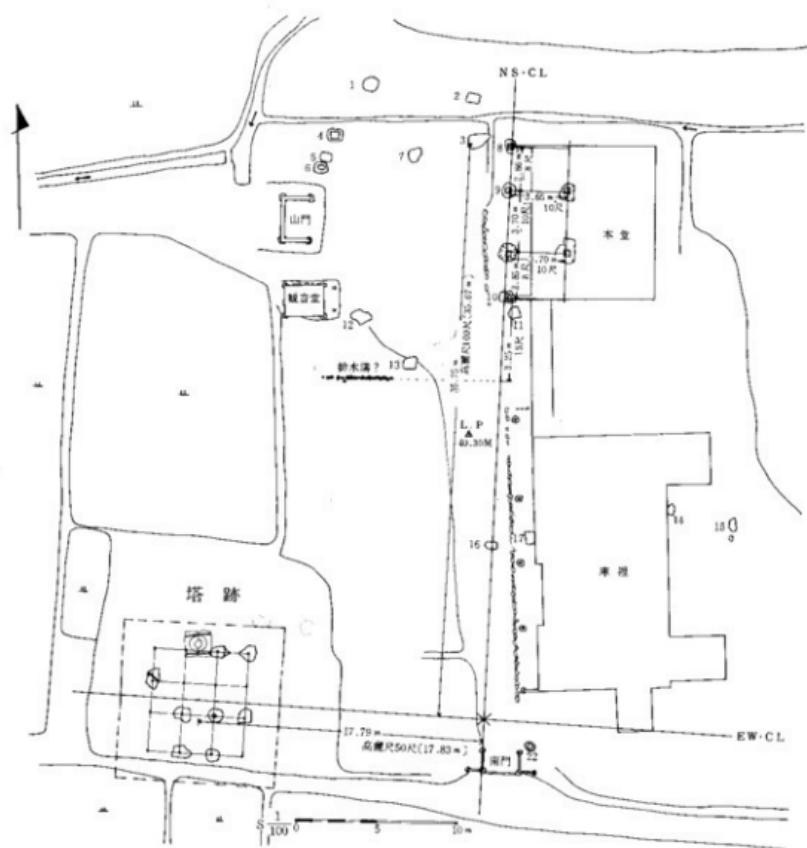


Fig 5 塔、講堂跡測量図



長隆寺跡調査報告書

松山市文化財調査報告書III

昭和49年3月30日 印刷・発行

編集 松山市教育委員会社会教育課

発行 松山市教育委員会

松山市二番町4丁目7の2

印刷 明星印刷工業株式会社